

された「パレクバーゼ」の実質的対応物を、それと意識しないままにヘルダーリンの悲劇理論に見出し、自らが再構成した初期ロマン派の反省理論にもちこんだといえるのではないだろうか。

老いぼれ幼児と輝ける闇

——トーマス・ベルンハルトの戯曲について——

山本浩司

ベルンハルト劇の上演には今日、安易なドタバタ劇というキッチュ化、他方で政治スキャンダル化の傾向が見られる。しかし彼の劇は、特殊時代的・社会的な契機もはらみつ、それだけに還元されるものではない。確かに見た目はモノトーンで、単一の祖型の永遠の反復と見える。室内に設定された演劇空間は、牢獄をその原型的イメージとしている。旅立ちが話題になるのに、決して実現しないなど、劇空間には外部が決定的に欠けている。劇的な事件も起こらない。何かのイベントを待ちながら永遠の準備期間にあるからだ。こうした準備のための空間の原型は、仮面をつけ、化粧をし、衣裳をまとう舞台裏の楽屋にあり、いわば舞台裏が舞台にかかるのだ。人物配置も、家父長的な権威者が過剰な弁舌の暴力を寡黙な従僕に行使するというのが主なパターン。しかも、対話によって劇的緊張が作られることはなく、ただ一方的な繰り言が聞かされる。さらにテーマも執拗なまでに絶望、狂気、老い、死を巡る。ところがこの闇が光る、それも闇の彼方に希望の光というのではなく、闇そのものが輝くといった印象がある。観客／読者はかくして笑ったものか泣いたものか、何とも判断がつかない宙吊りの状態に置かれる。

ベルンハルト劇は、明暗、虚実、生死、老いと幼児性、権力関係など様々な両極が絶え間なく入れ替わる運動体として捉えることができる。なぜなら、弁舌の暴力は、動作の次元では徹底的に従僕に依存しており、ここに権力関係の逆転の余地が生じるからだ。その際、台詞よりもコスチュームや仮面などに大きな意味が与えられる。例えば、鬘と入れ歯をつけ車椅子に依存する耄碌した主人が着替えのために従僕に身を委ねる場面は、母子的な関係の反復と言える。言葉を発することも、這うこともできない乳児、頭髮も歯も生え揃わない乳児が、ただ泣き叫ぶことで主張を押し通そうとするに似ているからだ。権力者が幼児性を併せもつ老いぼれ幼児だとすれば、閉鎖空間も母胎の一変形と言えそうだ。しかしそこは保護される場所であると同時に、愛情の名の下に徹底的な支配が行なわれるところでもある。家族という闇は、とりわけさまざまな小道具によって表現される。閉鎖空間は父祖伝来の家具、写真、肖像などがによって占められて、伝統の重苦しさを引き継いでいる。ベルンハルト劇は、外界や歴史を捨象しているのではない。歴史は室内装飾という形で厳然として存在し、登場人物は歴史の囚人なのだ。

ベルンハルトが提示した可能性のひとつは逃げ去ること。もうひとつは遺産の放棄だ。

『消去』の語り手も、『惑乱』の領主も、遺産の寄贈というかたちで永遠の連鎖に終止符を打とうとする。最後の可能性は、閉鎖空間に留まりながら、永遠に反転運動をつづけること。祖型の永遠の反復は、ちょうど壁に掛かって子孫を睥睨する肖像画の位置を動かしてつづけるうちに、父の肖像画と母の肖像画が入れ替わるように、記憶は錯綜し、伝統の重荷から逃れることもできるのではあるまいか。

トーマス・マン再読

岡田浩平

クラウス・ハープレヒトの大著『Thomas Mann — Eine Biographie』の翻訳作業の過程で、久しぶりにマンの著作を読み返す。新しい発見がいろいろあるが、ここでは大戦後トーマス・マンが初めてドイツを訪問する経緯に触れてみたいと思う。

(1) この亡命作家の戦後最初のヨーロッパ訪問は、1947年5月のこと。チューリヒでの「国際ペンクラブ大会」に出席のためであった。しかしこの100日余りのヨーロッパ滞在期間中にマンはドイツの地に足を踏み入れようとしなかった。

亡命中のトーマス・マンと国内に留まった作家たちとの間で敗戦直後に始まった論争は、相互不信と怨念に満ち、感情的にひどくこじれた雰囲気をつくりだしていた。そこに「非ナチ化裁判」での指揮者フルトヴェングラーの発言。ナチス時代を自分（トーマス）とは正反対の生き方をした大物芸術家が、その行動を堂々と弁明しドイツ国内で広く共感と喝采をもって遇されている、という。マンにとって大いに腹をたて苛立ちを募らせる情報に違いなかった。彼は日記に「Furchtwängler」と書き込む。苛立ちと嘲笑のほどを窺わせる表記であった。訪問要請がしきりに来ていたにもかかわらず、ドイツ訪問は「時期尚早」と判断せざるをえなかった。

(2) 亡命後初めてのドイツ訪問は、1949年7月のこと。ゲーテ生誕200年記念行事への招待に応じる形のものであった。7月23日、バーゼルから列車でフランクフルトに向かう。出発日が近づくとトーマスはしきりに鼻血をだすようになる。医者の診断では神経の緊張疲労が原因とのこと。出発当日も日記にみじかく「まるで戦地に赴くような気持ち」と書く。現地ではホテルでも市中でも常に四人の警官がトーマスの身辺警護に当たるような有り様。パウルス教会での記念講演を会場の外でスピーカーを通して聴いていた聴衆から帰り際に「また来て下さい!!」との勇気づけの言葉を投げかけられてほっとする。翌日にはミュンヘン。25年振りにみる町並みのすっかり破壊された光景を、トーマス夫妻は静かにそっと涙ぐみながら言葉もなく見つめていた、という。翌30日ニュルンベルクを通りバイロイトに向かう。バイロイトではホテルのオーナーが来客記念帳を出して、トーマスにも記帳を求める。記念帳をめくると、ワーグナーの祝祭劇の折に投宿した第三帝国のお歴々の名前がずらりと並んでいた。トーマスの顔に一瞬怒りの表情が浮かぶが、その怒りを抑